

この連載でも何度も書いていますが、がん検診の目的はがんによる死亡や不幸を減らすことであって、早期発見そのものではありません。

見つけなくても命や生活に関わらないようながん（決して少なくありません）を早期に発見しても、無駄な治療を受けることになり、マイナスでしかありません。これが「過剰診断」です。

福島第1原子力発電所の事故後9年目を迎えた福島では、甲状腺がんが診断される子供が増えています。原発事故当時18歳以下だったすべての県民に甲状腺検査を行っており、これまでに200人を超える小児甲状腺がんが発見されています。

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

福島県だけでなく、近隣の宮城県丸森町、茨城県北茨城市でも認められています。共通しているのは、自治体が子供に超音波検査を行っている点です。もともと子供たちが持っていた「無害な」甲状腺がんを、精密な検査によって発見している「過剰診断」が起きていると思われれます。

チェルノブイリ事故後に増

「過剰診断」増加による弊害

この検査は、チェルノブイ

リ原発の事故後に、約700

0人の子供に甲状腺がんが見

つかったことから始まりまし

た。福島でもチェルノブイリ

と同じことが起きているとい

った報道も見られますが、国

内外の専門機関は「小児甲状

腺がんの多発と放射線被ばく

との関連は認められない」と

いった見解を示しています。

小児甲状腺がんの増加は、

えたとされる小児甲状腺がん

ですが、過剰診断による増加

の可能性もあります。チェル

ノブイリの検診で甲状腺がん

と診断された子供たち936

人を長期間観察したデータで

も、がんで亡くなったのは2人(0.2%)のみでした。

一方、7人が自殺、5人が事故で亡くなっていますから、検査がマイナスに作用した可能性もあります。わが国でも、1000人以上の甲状腺がんを数十年にわたって経過観察したデータがあります。甲状腺がんが死んだ方は一人もいませんでした。

韓国では、甲状腺の超音波

検査が広がった結果、20年で

甲状腺がんの発見数が15倍に

増えましたが、死亡は全く減

りませんでした。この反省か

ら、無駄な検査の自粛が進み、

甲状腺がんが激減していま

す。日本も見習うべき動きと

言えるでしょう。

(東京大病院准教授)